

マツノマダラカミキリに関する研究 XII

誘引剤による捕虫経過と保線虫数

林業試験場九州支場 岩 崎 厚
 森 本 桂

現在マツノマダラカミキリ用の誘引剤が市販されているので、その利用にあたっての基礎資料を得る目的で、誘引剤による捕虫経過と捕えたカミキリムシの持っている材線虫数を調べて、羽化経過および産卵経過を比較したので結果を報告する。

調査方法

1. 熊本市黒髪にある林試九州支場構内に井筒屋製誘引器3器を設置し、誘引剤としてホドロンEを使用して、1974年5月18日から9月3日までとれたカミキリムシを毎日回収して、性別、成熟卵の有無と共にカミキリムシの持っている材線虫の耐久型幼虫数を記録した。誘引剤は10日ごとに交換した。

2. 支場実験林(立田山)に1974年5月30日から9月3日まで餌木を設置して、3日ごとに産卵痕数を数えた。餌木は胸高直径約10cmのアカマツ1本分を50cmの長さに玉切りして井桁づみしたもので、15日ごとに新しい餌木と交換した。

3. 羽化経過は、直射日光のよく当る場所へ4月末日まで置いた被害木と、日光のほとんど当たらない林内へ置いた餌木とで調べた。

結果と考察

調査結果を要約して図に示した。

直射日光のよく当る被害木からカミキリムシははやく羽化することはすでに報告したが、今年もこの傾向は同じであった。誘引器には5月27日からカミキリムシがとれはじめ、8月22日まで採集できた。この期間にとれたカミキリムシは171頭で、66頭の雌はいずれも成熟卵をもっていた。誘引数は6月中旬から7月上旬にかけて多く、7月中旬から急に少なくなった。材線虫を持っていたカミキリムシの割合は、6月に高く、

7月中旬以降急に少なくなって、7月下旬以降とれたものはほとんど材線虫を持っていなかった。カミキリムシ1頭当りの材線虫数は6月上旬で高く、その後だんだん少なくなる傾向があったが、これは羽化後日数を経過したカミキリムシが多くなるためであろう。

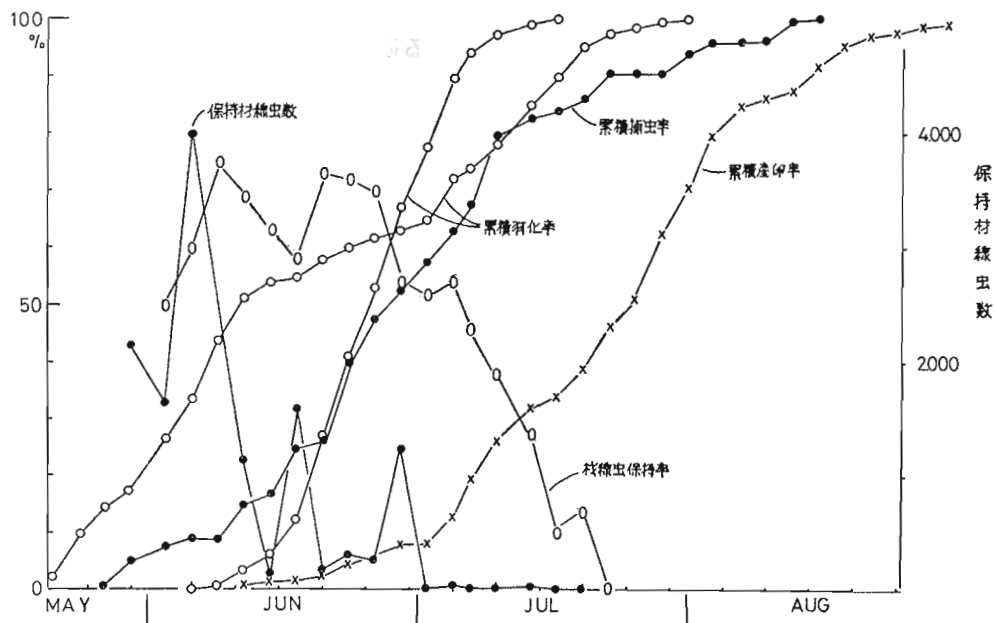
産卵は餌木に対して6月11日からはじまり、9月3日までつづいた。

マツノマダラカミキリは、羽化脱出後約1カ月で材線虫を落してしまうこと、また雌は最も早いもので1週間、平均3週間たつと産卵をはじめ、産卵最盛期は羽化後45日頃であること、および誘引した雌に全て成熟卵があることなどから考えて、誘引されたカミキリムシは産卵をはじめた頃の個体が多かったのではないかと推定される。

1974年の結果を昨年と比較してみると誘引経過および材線虫保持率の経過ともに昨年より2週間ほど早く低下している。

引用文献

- 岩崎厚・森本桂：マツノマダラカミキリに関する研究，
I，羽化脱出から餌木に集まるまでの期間。日林九支研論26，205，1973
- 岩崎厚・森本桂：マツノマダラカミキリに関する研究，
II，産卵痕数からの密度推定。日林九支研論26，
207～208，1973
- 森本桂・岩崎厚：マツノマダラカミキリの後食予防に
よるマツ類枯損防止試験，I，後食予防の必要期
間の推定。日林九支研論26，201～202，1973
- 岩崎厚・森本桂：マツノマダラカミキリの後食予防に
よるマツ類枯損防止試験，III，カミキリの保線虫
数からみた後食予防必要期間の推定。日林九支研
論27，193，1974



誘引剤での捕虫経過と保持材線虫数、羽化経過、産卵経過などの関係
(支場構内, 1974)